

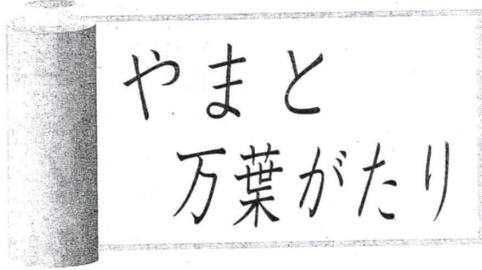
采女の

袖吹きかへす 明日香風

都を遠み いたづらに吹く

(志貴皇子 卷一・五一)

この歌は「明日香宮より藤原宮に遷居りし後に、志貴皇子の作りませる御歌」と題された一首です。藤原宮への遷居は『日本書紀』巻第三十に拠れば694(持統天皇8)年12月6日のことでした。現在は「藤原宮」を含む京域を「藤原京」と呼び習わしています。『日本書紀』には「藤原宮」とはあって「藤原京」とは記されておらず、「新益京」とあるのがそれにあたります。「新益京(藤原京)」は条坊制に則って造営された中国風の首都であり、それまでの飛鳥諸宮とは根本的に異なる国家体制が具現化されたものといえます。歌に詠まれた「采女」



とは、天皇の身の回りの世話などに従事した才色兼備の女官を指し、高松塚古墳壁画の女性像などをほうふつさせます。そのきらびやかな服の袖を吹き翻す「明日香風」が、都が遠くなってしまうのでむなしく吹いているという歌です。

せいでいさぎ程しか離れていないのにも関わらず「都を遠み」と表現しているのは、実際の距離ではなく心理的な距離感を表していると考えられ、大きな社会の変革期に隔世の感を抱いた歌とも、旧都の荒れた様子

が、『万葉集』に載る6首の和歌はいずれも秀歌とされています。明日香村内には、甘樫丘の中腹と史跡飛鳥宮跡との2カ所にこの歌の歌碑が建てられています。前者は1960年代、後者は2000年代の建立で、その間の考古学的成果を踏まえて飛鳥浄御原宮の比定地が変更されたことに拠るようです。(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか)

【訳】采女の袖を吹きひるがえす明日香の風、今は都が遠いので、空しく吹いている。

弥彦 神の麓に 今日らもか 鹿の伏すらむ

皮服着て 角つきながら

作者未詳(巻十六・三八八四)

この歌は「越中国の歌四首」のうちの1首として『万葉集』に収められています。内容は、同国蒲原郡の弥彦山にいます神に仕える鹿の姿かたちを讚美すること、その神の尊さを歌ったものです。蒲原郡は702(大宝2)年に越中国から越後国へと移管されており、この歌はそれ以前

の作ということになります。弥彦山を神体山として祀る彌彦神社は現在も新潟県西蒲原郡弥彦村に鎮座し、越後国一宮として信仰を集めています。ところでこの歌は、5・7・5・7・7の5句からなる短歌の末尾に、7音の1句を追加した形式です。これは「仏足石歌体」という歌

やまと 万葉がたり

体で、『万葉集』ではこの歌が唯一です。奈良・西ノ京の薬師寺に現存する奈良時代の仏足石(釈迦の足跡を彫刻して礼拝対象とした石)の傍らに立てられた石碑にこの歌体の歌21首が縦書きの万葉仮名で刻まれており、仏足石歌と呼ばれています。その第1首「御足跡 作る 石の響きは 天

に至り 土さへ揺すれ 父母が為に 諸人の 為に」は仏足石を讚美する歌で、第6句の「毛呂比止乃多米尔」は第1~5句よりもやや右に寄せて小さい字体で記され、第5句の内容を少し変化させて繰り返す形をとります。

【訳】弥彦の神山の麓に、今日も鹿が伏しているだろうか。皮の衣を着て、角をつけた姿で。

この形式は第2~21首でも同様であることから、仏足石歌体の第6句は短歌体の末尾に唱和のための1句を付け加えたものとみられます。おそらく、仏足石を礼拝する人々がこうした歌を声に出して讚唱したのでしょう。(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

このような仏足石歌体の特徴は、今回取り上げた歌でも同様に確認できます。第5句「皮服着て」と第6句「角つきながら」は共に鹿の姿を描写しており、鹿の形容を繰り返し歌うことで、弥彦山の神の下に伏せる鹿の神妙さを強調しています。仏足石歌体の本質は、こうした神仏の讃仰のために歌われたところにあるのでしょうか。